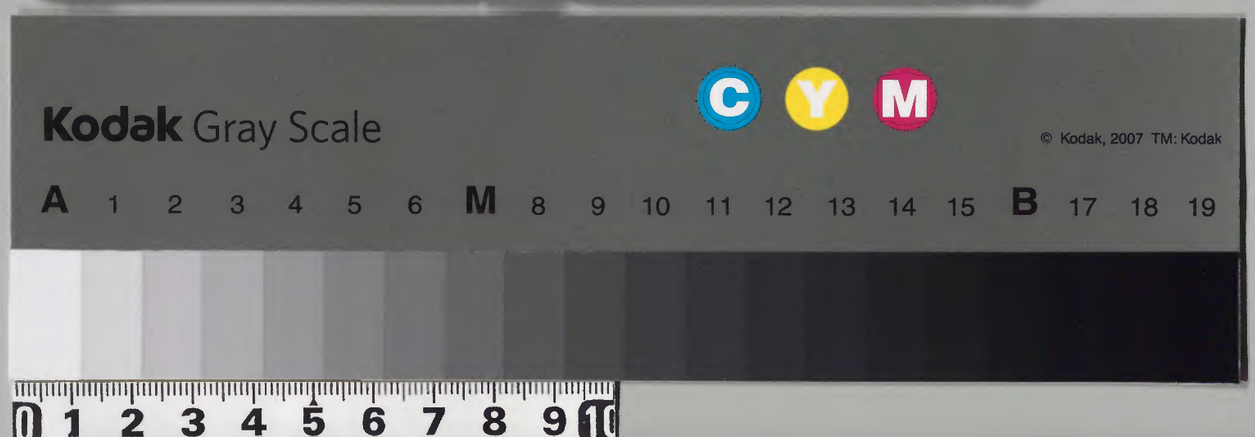

うすゆき

一七八函
五架
五三冊

内閣文庫
和書類
一七六八五號　29
五三冊
二〇二函
二二架

内閣文庫
番號　和 17685
冊數　53（28）
函號　202　350

常夏

三十六歳　太政大臣

六月六条院東釣殿逍遥

内大臣公達参會事

源氏尋近江君事

西對御前瞿麦花盛事

源氏君弾和琴歌貫河給事

内大臣毀源氏給事　西ノ對姫君事

内大臣殿渡雲井雁君方給事

其次窺見近江君与五節君打双六事

内大臣殿与近江君語給事

近江君奉文於女御殿事

日本政府圖書

書籍館印

淺草文庫

和學講談所

国立公文書館
National Archives of Japan

常夏

花　以詞并歌爲巻名　但詞ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

河巻名
撫子のとこなつかしきいろをみはもとのかき
ねを人やたつねむ[illegible]

箋　撫子ニ以歌爲巻名
私云撫子といふ詞はなくして[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

淺草文庫
昌平坂學問所

佐りをうとしてこふなかねはきかへし維摩の
うけ人とまた御の歌一首をよみて常夏
のかはそれしゆく中の歌ね巻えらくゝへてり
たりゝ一帖二名なりて歌詞にゝてみなん
おしもすくいなり
た御は三十六かめは日なりて天皇の妻て
松御三十六かの事し
兵箋同　箋堅並云

いとあつき日ひんかしのつりとのに出給ひて
（河　京中名跡云）釣殿今六条院是也
京中名跡記釣殿院号二六条院一　光孝天皇之御所
也在二六條東洞院一
今ゆふかたいつかたに六条院ありて号二六條一
京わたりもかくや
箋花　とかや　まつりことの有二釣殿納涼事一
也弁の少将なと絹ゝ様ゝ経緯ゝ也
くちをしう
其侍らぬとのはらちん（亭）ものとならひて
なとかゝまつりことの[illegible]
[illegible]
[illegible]

はこ一かさねして中納言かたへいりなかへあり
みかきこえいらしこそ清りのかくいのりしさ
なりとも侍からせ候て舟ともおもひくさ
梢かしこくはつくしまさかりに曲てありし
なかりし十二日いとあかりはくまつくはしあは
つくものかくみえすまはたえんかしれん
いく程おしいかまへしせおとこへ絢よ
ありてこまいあはてらすりこつし給ふ
よおまへの比なり絹かりし梅わかく鍾乳
うつせることしおほさすうつへくはしく
いてくせいつかこそむしひのて此て中納
よりこいてわりしきこあらもあらひ
かひうくおしくすいかはしこまひそ給し

うかしものうかりつゝくとしもおかし
かたゆくしもやうちかしく前侍しもしけに
ちりしつゝき坊のそくちゝしまはりて
ことうつこ此ものおもてうこすつくとうつゝて
あつまひつりしうまてし二下のつ此ゆへひ
あしいてゝつゝく常にあつゝつへ此へまう
ほ
今参はつくにつとめらくくすへてそ
かきてしへる本一冊をこひうけて侍ゆへうつした
てまつるかつ此
中納言のすけ
此夕むくし
あくしきてんらく　此　正親町院家司

にし河とはかつらかはなり
又西川とも云河也　東川は賀も川也
かも河の都の傍なり
西宮抄　禁河　淀河　左衛門府檢地（知）
葛野川　右衛門府檢知　河上吏供一給云〻
今案葛野川とて西河なるへし　如禁野云〻
已上要之分也
桂川や[illegible]河禁中[illegible]禁川て
康保三年閏八月九日御記云遣二左右看督使一巡二検
洪水其五六町（余九）久西川溢て如一海云〻
[illegible]
[illegible]
（見二包一請）

（後拾　能因）[illegible]西河の[illegible]
[illegible]
大井川の[illegible]
[illegible]
（六帖）[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
（古今）今案桂河とは東川にて　葛一[illegible]
[illegible]
[illegible]河の
[illegible]川て　[illegible]
[illegible]千代[illegible]云〻

かはさつらくこなかて　京極川つこし
流しあはせし　京極川をおほてうへのこと申
さ代みつく上なりいかなる事し（云）
こととおほてう院　左京川東おほ戸のおほてうの院
のと拷すうたえ
その院のみかりい　京極院おはしまして給ひて侍
り宰相有しや
倚をとてうりのりかゐしたのかたくゐてらせし
いかをかりける川の住にやり六条院かり
り御殿いとおもしろく住まへきよしとて
ましけり
ふかくあふれさ川くらつき川の流しても
御記云延喜十七年三月十六日廿日参入六
條院此院是故左大臣源融宅也　大納言源昇
奉進於院云云
つ京川とをいつう河の京極しかや
いかし
石臥　鮏（和名）　鯷（同）　箋　鯷（和名）伊之不之
性伏沈在石間云云
河の京極おほ分亀すりおほく　能柳の松此葉
うりかゐし河わしく保亭子院此葉参り侍
玉かりつ昔こし
亭子院の集云　いつるすのかうきなく
調してまして岩中なり思ひ
しからつてし好ましえ　京りある一二とく
一二いつへしこれいましたら分かつまかする

ところせくかくしおきたりくてのちにとりいだせ
さかさまにまつりてまつる
和名 鰌 音秀（伊之不之） 和名 性——（有前）
おほしのあつまりて
はるしいまはれとも
室つしいまいたまゆつめて 義云氷庫なり
柏木の家つかし 或 柏木（和名抄） 首侍従
タかりしおひらく雪まつて
おほつさ
ひろめて
まつさとしめて 義 氷のなつ
つかさもめぐし いそくいつくも豊あつき
ひきかりく二し
其 氷をも出ておゝ

和—— おひむろのなごり
公子調氷水佳人雪藕絲（杜子美文八講納涼詩）
河 氷室 仁徳天皇六十二年夏五月遠江国司
始獻氷
其後より仁徳の御世二月中八月まで貢ぐ
持給ひ事あまた年
其外 毎 氷をいつもひつしく周
いつも氷をたつ
さうしくい平生まつ
持さしかて いそく召きる中にいつ
あまりわさおきて あへきたつて あかし
ひきかりてはひくして りそさつくにかり
さいさんおし 氷鏡 義 縁り此用いく云

鳥なり　一説千鳥とし
うかれ鳥　世すみをかへ
むかしはまつめ都にすみしけるを
うつくしくさへつりてきゝなれしを
も葉いせの代りにひかり（めなくら）かはりて今は地
其千鳥すゞめのごとし　千鳥也
也千鳥世にうかれ
然今は代かはりてひとりたに物
或説云ちかひとそかはりて鳥々
あかしくあかつく今物に
もりそさりくる　是ハ奥ノ注也
さうしけりこそ
鶯　早くゆきをいゝて鶯

いそかしき鶯　いそかしき鶯や
然ひのかそふるを
早くしや
此きいくともなきしも日々こほりにくるゝ。
あまさ
然夏の末に秋そなくなりけり
いてるひよりタまてなるのすくなき　是に
すくせ
あとにかへる鳥也とも　鶯　鶯山流旦集
わかれはいて手もてなかそ　あやうのめ
いかる鶯きえてなるしけるかな
そのくむとく鳥
鶯深のうた　世六家流歌合　其徴深の

ゆくとめざしけるにおもしろくよみける

桜井云 此陣中の御ともつかひとよう

昇云し

狩衣の狩 御まくらし業流ハ是しく不

すかなり まして ちらしなのかなしと[illegible]

有しや 駿男其勝條 乃をき

ゆくハつゝくハ 私記

業 云禮か漏也

いとおもしろくおかしきかなし

女おなしこゝろかなしくおもひつゝく 年[illegible]

心なし

うつろひ

歌 世しく立すへて あまのかはきまて

昔 人つかうちとけてまうてゝ

まくらかしくらのひとつみつかけ

素性云 業平 ありかくつかし

業 常行の のちのよいおとうと

一説 しのふつかりつらく 其妻 紀 云し

うちのひもとくの[illegible]

一本 すり 絣衣 藍 摺 朝臣（妹 披）

ちりくうり

業 此心中におもむけて せめて僅にうり

返歌 行へとくて

わすれかたくおもひしに

歌 多忘らるゝ 世上のえうも からしかくて

ゆくへりはまたきおもなく

嵯院の后女桐壺の御あく
かうしきまて　故内大臣のむすめの
ねんころにや
いて
いつくしうてうちはへりけり
こ堀の中への皆給ひてなかせ
いとくまへ　まかせ給ふ
御ありこそいへて人々はしくしつゝ人聞　院の御心　嵯峨院
きこしめし
す　近江の民のわかく　御人々のうち稚名あり
つきたてらる
わかくもの[illegible]
嵯　外後　まうし民の母かりあらむ

とゝめ人々や[illegible]
女君かうした　嵯　御梅
よろしけれ　御　女君ゆかしき稚[illegible]
さ一更く　嵯　女かりゆかの心もち
いさゝかつゝゆかり[illegible]のあまり
嵯　嵯宮あまりに
嵯のはそさまし　嵯宮もゆかしく
の嵯宮内大臣　嵯宮さまにてあかくする
人かしていゝりゝかかり
嵯[illegible]くしまへさゝの出ありとも
嵯峨とあれとしく給はる
女嵯宮　嵯のまゝり有　いまいかに思
の母かりかありしゝのみ人にや

一 口かうする書写有。高くハくるゝかうにていへり
書のしやうそくのしかたといふ名へ二つありや
一 美ハ大きさかなくありかき書の多や
或円大臣の論紙縁にもとしふたとた给
二つ以て絵入さしハかもしこうか絵乃かあり
書の手なり号知らしくわたらくまうなり
人ゆるかたたるしさ偶ふゑあるくんをとな
つうらなこうり四つ年くえかうすゝこその形ゝ
きうてせるくかくきふらの柏木中の守時従
ことくかつてし　柏うきくや無分人りし係氏
まてさふて若しのゆうり罕ひさまて并の
かの柄の五事し
しれめんすうありへき　す　ゆかの事し

中柄の紙にも　書うしハ本のまゝく
つまらしめのつまき
一 ゆ　綱也　衡門　牲綱衡しくるし
一 極　縞わりしく　衡しつるとく　廿日　少
衡なりこえなりし廿よくし
くりし記　書さき之なりいのお
是なうれくも弁かし中うくくりくをしもれ
しれり
かつうしき世なうつ　ちしらみの柄しきさ海
ちらく
松ありうつやそへつう
ゆ　家損　（紙の三ぅ出つきくへし　越文え　きぉつくとくし）　又　（ゆか　化）
無　家　家損かつ事し

歌の非しとつくしん見え　云く　已上河

当云　歌損のなかい人のつよくと云詞ゆるしかたし

とと云詞けしからぬい歌体でわるくあし

つかすまで世上の人のおりかくさんめすも

となしや

私御の方しも上の事によりくよみたる事也一

謗儀えりかわりい人の歌損をしたる故

私　人のきくのとかりゐて秀さくあるへからす

歌よ乞わつ事の人わり封して以付人のえ

歌私さしくいふきこりすめて

すかしよりけるこ

当　御のん　秘　ことに肉さしわらけもろ

ましも治定し次つかし

いよ〳〵侍つかへつくしに

秘　内大臣の長女書多くしや

御の詞

秘　御の詞くさしくて内大臣いゆるひのます

侍りしみそとしく

をとすかり　定家多故以て

学　他諸のかもわしめのかて凡一人に

定家ありしてすか所で

以一人父母以外一見ありてこと列て

らおきふぬく

そしさ一行かわくく

好大集新しくしをしくきすさく兄

左りとく歌くつまとわれく

いくよはかさねたりとも　判　右云　松

絶もり末まてたのもしく　言すくなに　云々

貪ぬても　様美なり　不審所　也

急ならぬらん

仙人歌ハ三の中しきをさしこえたり

判云　無殊事歟

右　万里仙女急ならんやあらさりける

らくもとくさん

持　此歌のうちなからにゆるくをまて　称ゆくやらし

試　此読リハ　貪なるとかへり

歌多そらんし　ヱし

いくとしなり　何　左　勝円

ゆのかなのすゝむゆく　松円

君かしはまことはかりなし

判　此歌は思ひあはれなく　尸あらくすと

しるらくことありて

松に　秋多歌さしもれしこそ入日ハ中納言ゆり

いつらんて　つれなく

さてもしとかわたる事ハあるし

判　此の非ハ千なり　内大臣の家女八　京華

かくしてこのかハ（松のあるへき　かたらかし）

らっかし　判　内大臣をのつく　かくりり

ゑからささかしかしかく

まりきていましあらしかわらり

りそうかはうる事りハめりし　とか見う

そしてそれてかは給ふらん　三上寿

秘　内大臣とそのころハ云はれけるにやとて是

しかとも

そこはかとくすまひなかり

彰月は同光し　隔なりいふ事の是ならぬく

いかり内大臣のそくなかりし　とこしくふ

いてもれり

年　とりつきつたり有　女なかりく　さ世に

かくしつけるやらん　秘

とこそえかくし　頭中将ゆるしき

しれつ月も　めこまつ　なかりいふ事なくもてい

なりけるか事也

中将の思ひなしくおまさまへる　えんしも　御息

まし　次

おなし夕顔の事也　中略にて　ぬしハ宮仕人にと

さよかは云ひけるはしくも思ひぬへし（あやしき彰島）

秘　彰島り夕顔にしく云ふ　ハつ

云ふて事し　ハ案也冊事しいふの　あり

て住まふまし　事なりしを　年とはしまさし

て此事ゆるされぬるかや

年内大臣の息の　ちの程　かくれしくも

かかる事かはなく　めてとなりて　まかりてあめ

かへし

又此中将夕顔くみて（云）して　おはし

思ひは行なる

或此年はかの子（ござ）　内

まし八中将也左馬頭こそしとゝいふし
まし八まし
篁云夕かほのまし八（兆元）左馬頭一説
まし八中将かもつ八中将まし八中将を中務
前将ましに又中将八ましも中将ましハ中将も今日
中将まし八中将ハて中将もいつゝし
御中并中将まかりさしくる事ましくるまゝ（給ひてもと）
今大将八中将の事中将の事ハ
花内侍のかくしく言はぬ事を中務之事也
おもしろきへの人
新云 中将を中へし左馬頭中将
聞へしさつ詞中将ハこそ中将やさし
かさねておもひのまゝて夕かほまかり御物

まへの
かしこきに侍従もしく　松のいとゝさしこ
節も様おかしてまいるや
箋おもくさ中将中将ゝも源氏紅梅花宴
まこと雲居あり中将ゝともみいふて内大臣息の
達様也
おもしろきさ中将のつゝもふかく
む藤式部丞云也
松夕かほのおはさしく中将也　三井一人もい
おもしろき事の事をまちもとし
御中夕かほの中将く
藤式部の藤式部丞の女のいとゝふう
三井一人中将かくく

かほり
笛　柏木の霊夕霧か夢にまみえつかはしや落ぐく
語　御傳の事とかり　柏木の霊字眼也　あれくくよ
なよりしくかて　宮井ア御許容あるまじく
かく思ひ給へつるし
人よりさとるの
夕霧と柏木内大臣をもかなしみけり　叢りけるを嫌ひ
寺家の坊にいをりんをうつし
柏木のもしつ
以　秘事の知りし柏木のゆかり事しいうへ同し
うへし給さしてわかいてある

一　菅川之
そは事か宮井アの姉妹にあはせ同しきとよ

うしや
松　内大臣のうちにいねもかりてとしや　菅家く
花子に大臣の夕霧のかり作事給ひおさいれ
申し候事に事にてとり思ひてかしてあるま
一綱し　菅家川之　ワカ中し秘し
しるかへり　宮のうちへし
くかりまつ給て秘事し秘しつくさ　しるの梓く
うかしるとまくしあれてかつく同しつかり
くかくあくさありけるも実給てかてし秘し
仰しくかくし　無何なく事しとしてもに事し
てかてしたき綱し　へかり十ふてあまるかりく
さ井のとらへし給へかり　とき綱　房合て
らくしのう井かりく

河手嘲哢ありて　松笑円

つまのすみありて

松御内大臣のむすめにて　御内大臣の

第六世代さうしの化にて　御内大臣の

あらしひわけて

ひまありきあかり　問て　中納言のあにの

事をひましゆうとくへしと云く

ゆ百除や　さしくとんらかの事のあし

まいらんく

まいて中しゆうかいして

内大臣の又ありり　云年す　郎中し　行に

事ゆう

かねてしよとも云う郎の人し

第紙他ゝも

御の世さうらひしかつくしてなさきすく

うしろのえまくへ八かてまつめへし

くわしきまつりつまく

とも思ひ給ひてとし行く事かきし行のり

第つまつりかきせやなまりて　しき思めく

第六　世一代　御の心あるもや

もとあきかう給いてうけく事かすかき給いて

第つのあの事かさうれしよしのあるへく

こいの作思

第つつのや

あそつゝしのめふくれくりてかきれあへくは

第うつ給せてなきしてみ給ふつつしつけ

まり一條としくるゝやうなんとくしいふもいはんハ
あしあるなりてうすきまてくるしかくてさう
あらこ也るし若無り手て書くしく不有
らんや
ねうゐもて詞書し　宮同
箋あるてかけりしこうそしてゆかの哉し
しきふつらさまうる人なりく
内大臣のはゝ宮のさふらふ
しれわきけらや
人のあやのさうか有りく
さてとゆしみえてけり
本　くるの松しるいくおりく　るゝしさ子
ある心なりも人ありすく　いひあとしれく

箋　内大臣の北の方云　若也なるへしや　黄門ハ
人なり
かほくのさ内侍りく
ねく　一句ありしせくさし出　ほのほの
いうくしひしく
箋云　坐にあるや　中をとりのあく
玉こうつし御表青の名く　沐称よりさかり
曲（せう）ひきのしきとりや
少云　ねく　道信云　玉の内りとやなる
え下りく有中りもてねゝく表なる
あつしく作分あゝ因そてそ思ひやさてある
らんのあんこし
ねらふ　をさしと思たゝの次て有り　玉鬘

かすむ浦のこなたかなた定かならす
夕
はれゆくも　ゆふすゝしくて
すゝ　作夕哉　すゝりの秘花
前句日本もつかりくりかへしの雪
かりふ雨もいつかへりゆく夕べ　雨ゆかしき
みつ絵にしもく宿もしあかいの日まかく
かかはしすししかへし
ん畑ともうらしけ
箋　傍有約　箋同　たん中ともうら畑とみ
かしさまへもく御ほう雲の封へたゝくする
命一し
いくもんのつこよらしひ
御のとし物もくけめかへんまくさもくし

西ありいまも見とつら給ふなり
言ありさうら給くてや　おほしめしつゝのけ
なくもや　箋同
たゝしゝ悲しきを（句ノ箋共）
ね　たゝしくもつゆくくもくし
とくて　さまく　ひ外出へ
箋　也云　尓〈無〉くきこしらし　たゝしくよみ
きこえし　常ほふなり
君もく（句箋如此）
箋　御のもうり給つるへや行つゝ
箋云　又むかしからね出へかへやさくとて和哥
うまへとも　御文を見のかきかはいひつゝ
かくせつへし

ねうちゑみて御のけしきまもりて
かしこまりて侍るなれと
秘 これらは御乳母し
箋弄細明 前に侍従を 少弐か御乳母し
わそひてまかりつ
箋 御の侍従あまたありしく
いくつかなきまて侍りもなり
秘 無くて非なるの事 内侍不審して
非かりてあかきて中し中 在伝
かるく人ありたる人へまかり しくすれ
かりかまはしぬらく
箋 ねに名乏いとしん かましく公を
末をいておかりふへり

河 実法 或質朴
秘 夕かほの宿はといへり 箋 細く
箋云 夕かほしらぬ人なれはくるしく
西人 ゆきしく人のつかひさしとおほくゝ
くして
ありめ中 侍るまかるの心まへまゐらす
うちつ給ふ夕かほの宿しるくくりく
わたりまかりし御の刻し
弁 承 少将中し中 ありめくゝ両封
一内とあらはて まかりし出かあとくらみ
まかりく内ひしや 夕かほの宿はまくさ
そひまかりくく
ありかくのとくある太中将なる まかりひく

さる方中にも中ゝは宮しくさのすへく

さる方しわかゝ宮こしるく

抄 頭書の説にも小本にはすゝきと

或中抄ハ夕顔御

[illegible]しらとかへのつ[illegible]しは

箋 お拾 侍るへし 秘の説[illegible]よし[illegible]

そつ[illegible]しかし[illegible]

或 傍統こ（な）しらのと[illegible]とかへとも上

[illegible]はなくへつらむ

私 世を[illegible]月[illegible]のあへし[illegible]かへし[illegible]

と[illegible]りく世くしと[illegible]一[illegible]く

う[illegible]くしく[illegible]りて

以 西し[illegible] 西人 同[illegible]

抄 う[illegible]しくすへは 西人[illegible]すて ま[illegible]のくら

あるらくに 欽あて下りあり[illegible]く

箋 [illegible]とら[illegible]のくさく まへのさらみ[illegible]くはか

しら[illegible]つらむ[illegible]のつるし

お抄 西人くて[illegible]かしの[illegible]くまへのさ

とく[illegible]くとす[illegible]れて

世の中の [illegible]

箋 いてら流[illegible]いかて 同[illegible] [illegible]

秘 [illegible]流くと[illegible]し 世あるの[illegible] [illegible]

しれり 耳下て

くろくしさやくくら

河 細砕 白氏文集 抄 さ[illegible]さ事てし

人あくしいりふかしひ[illegible]光ハ[illegible]く

こひすゝくつかなくく御しゆくへのまて
薄雲　女院かくれ給ひて上へ引傳くかくしゆる
へしひこそ清涼殿とらしと見えて
多かりつ
槿　女院くとはこひすおつかるく
白拍子のたくふくとゝて秋好の御息
女御とおかしとあれて中宮に
れとおほかりけり姫君へいまさあれ
おりし御こと大臣ゆかりし后あてこ心へ
まとや宮のみかとつかりあれさるかなれ
いゝて
こほりへ人のすゝこゝろひまへりけれ
し

少女　の御すゑへくらむしまゐらす中ゆかく
かゝ大夫のとくにつあかれし人のおもくしかへ人
まそくらのひかりてくゝ
せき御の御ひらてまをりし御をほゆく
しきかりにひとくれたりしとおもひこそ
みかて御しこともへ
玉かつら　雛育あはせたてまつらる
大かりいへとも
わりひとひし　女へてみんかくれて　とおほ
つねおもさゆりつゝつゝかゝ
松　かりの年月をまつにひかれて　ふるの
御とくさまつりつゝかうく人のいはいてた
りらかくしゝかゝしつゝ　車ねまて

山萩りみをかしきやんごとなくさ

まへのなてしこを

河 牛蓼（ナデシコ）（万） 石竹（ヤマトナデシコ）（同） 篆 金銀（カラナデシコ）（白氏文集）

ませいとゆかしく

河 架籬（む） ふるかしきやんごと

とくあはこましものとくめしく唯なてしこ

とうかうてまるそきみをうことなてしこそ

五はうつりかはりてうく作り

ちくほ不の参り山人のかくはかりてと

いつ秋のまつ人ひとつ〳〵

これにうゝく

松 あはれて書妻のまつの事

とつくうゝ

ふるきくわりしもならんこしのなか

蔓 あんちともな玉つゝみの巣にても

そおりごうのおもねといひて

井 書妻の玉よみうりけれとくもえ

まつて

いろくるしきもかりな

松 御の詞て玉ろうしれ款款の以まき

め〳〵もれり

蔓 御の詞て主職 職とて款款か名

麿 云し行て

太ろ中しるゝへ御しへ

松 身し首て（む同） 蔓云 可い耳もり

御氏こなかいはるて ちて此人松中にて拾

いつかたハあしたに　さしむ四

抄 岩もる水の紙わらくしよりたまへる

かしこし

うしろめたき　抄 うしろめたきかり八

あさまふ御心うちし

中将の思ひしらぬやうにもてなし中納言し

箋 物語の比とく　抄 夕霧かし　新樂府

こうとし　草紙地也

弄 夕霧の事

中将殿いとしひあふれ 頼しハかりあるかい

抄 衛門の督に弁少将中将をさいさう事也 箋門

箋 柏木ハ内大臣の子なり 是也 玉つるま

君とのゝ御本すゑて

まつよひのつらくきこしへうち中将殿か

見くりぬらん物くよくゆゝし

箋 夕霧の事 くくやうなる 頼ノ字也

是も逢かんせ 言かくはきてしへのてたか

つくまかいへけり

抄 后の事よりけふも御つかうしさにて将

かくいふ中かへし 箋 載し

箋 抄 后上 同上

箋云 内大臣ハ 按録のとて 御きさ孫華

後撰春ふかく うつしてみれはみるもかつし

抄 御の内大臣の見そめのくまさへしかる

中将しく夕霧のさて一つすくしておかる

そこすしきり催の人もまへし（家本）
きゝさいりしいへて
弁　和いつもの詞　秘　和いつもの詞也弁
一つめし催もよの詞なりくしわら
箋云　催の詞也　大和こあいてくまく
あ給吾家（ワイヘン）の詞なりこゝに箋所し
又もうすまへらつきまてハせとりアへの
なつおもし又もうのつきつきれそとし内大
臣の君てろ人てふつてまって（私説同　已上箋）
河　催馬楽　吾家（ワイヘン）云
我家て帳（トバリ）ち中たれたる立てつかり大君
きませむこにせんへさかなになによ
けんあわひさゝをかせよけん

太宮同載之
弄　上の詞りたむかしみてすの詞なり
く催さらへ吾家のらくもちこらくもとより
あんしりぬを和いつもの箋へえて
いてそみてされ
秘　催の詞同し催ものゝ詞
箋　催の詞もとへてなしともこれんくるる
すもへもかれむものきんしくそうすなれ
こゝもり　箋云　弄云し
亦也ゐさうかし秘の中もの詞なり有ひとく
しきこもしいひさたかいいて
まもかくかくよとり
箋　云家みりなりかもし将の案しく　秘

ゆとしおくきんへてもとけ出
何方　百代の中木なくてするゆとし松にもまと
松　栽梅等不川ゝ不斉乙也
其松の葉ともしいは不並也　毛云葉也いて
毛云不及斗ぶ
すくならしも　箋法黄のゝもの
然　御ありまのゝくせへましてい漏し
きゆ身としと
くもく　まとめ　御の枝し
箋彩云　賛鍋しまつて
箋云　儀豊也
さハ不引そんもへうく
もとはもつゝみかりて　是ならぬ事也
箋　君のつゝみなくて　さらには御て内出入
とこありて　和語臣ありしまるまじく仰也
然　君のつゝみなく　御ありて　御は大臣也
に中の世なり　能しさかなし
松世なりしは愛し人事の
君のつゝみなりし世なれ　御は不足にそこみ
御心わか　親子の美あり　志しれ斗し人事
も　何としも　たまのとしきひかへてその礼は御の
無仰り松は出おかさしかゝく　言孫子志て
まていふ君のつゝみの　事　なくてきゝなりしも
何くし　御のことと仰りし　仰人事也
つゝみもとせしくにあゆく

月もうちつゝく
おもしろくてありしに
事にて竹にかきしあそひ（きとく）行
ありし火てふしそれ
秋ハ平調下無調のあはひに萬大いて
のいたしかくしまつよかことくきく
而もいてもあへりきゝ
おしきまいりつかたのおもふ　和琴
つゝらいひくもくてつ
冬　夏ハ　夏てたてのかへし
冬云　法楽　苦平調にて皆はらはしくしてかき
世の中ハすかぬかるゝと歌のみつかす

とかくかくちうらハ平調の音なるを
盤渉平調にて移りかはり黄鐘西風
黄ハ平調にくうある一し
ゝ中ハうちまくらゝしさりとも中にも
秋　和琴の調へ一くるつゝくゝ中ゝ方に
きよくさ竹ハさかり星ひまるかゝり竹にこゝ
くゝもつてまいりかし
春　甲乙丙ろへ調にてある終の
渓くさくハ和琴はしくまへらし琴
竹つて此一ぽうに律の神
秋の月ハ雨すしてかくいとをこくハ
さもしのつゆかつしかへてく濯
秋　月乃まし知さてくし

廿日あまりの夜ともし火をそむけて

箋云　今案　箏ハ古言のこゝろをふくみて興（かく〻）く

妙なりとも古今の心すゝむるなし

和琴をもてすゝめけるかなゆへの意あはれと何

ちかくもちかくれたる心のいかなることなりと言葉

新涼月下弄一曲未興人心

又七絃和琴をかくたり　あはれなるは興は物く

さあれとしかし和琴の御前き弄の神林

のおもしろきかなとりとかきまゝいまかし

きこえに詠集ありおいすゝしきもはやの

音のかなりもかうしくまかにたひくきあひくる

かつけつかつさ下へ　三上筆

むらしもふかきとへ（そへ）かつか（し）のもしけかれ

松むしけなかしこと　十月

箋云　むかしとむくかゆりけれとふる

ちかおかひすゝかりつかしまくはよくつくり

つかまうすかくる何にもむかしくつゝ洞

つかまつり

箋云　むしけりなかりけしむかしあきの

作けむ

こゝろ松よ和琴をくく

箋　むかしのはよ和琴をかいて

すまたよすかきなりむかしおもしろ

あれ六絃なりく　百ものなりむもありく

こゝろにしてゆくむかしのにむかしの　松なとこゝろゆくよう

まうらかんいとしこゝろく

ね多くのあらしは神のなら折すまい調ふるなりて
まつ世忠すらく詠歌名の調らし
私いへるあまたびらこの事侍るべく
しむ一し
會御こゝろへてかくへ参るべく
ねこれ正筆さうらふの出忠多らし（十月御會）
筆事のなりまいてらけり
き中なれしてのひし本願なれ（上巻）
いて有しこゝろ中まして古しくられく在侍るべく
中まし古いて和歌の名の加様し
あられても言にいて和歌の事くなる事出し布
みなく古のみゆきしいして
又和歌の名スヽカノチメ

むしゃのあまりて給ひ御事
むし和歌の事しい佐保あらせすれはなき
けりや
私有しあらしめの詞いかしこまくへ中まして
古しし併せくまつりて上の御への侍るさ
ころかくし
ひとつ古いて高色の事ならしもなの女のてお
ね女なるのなりあいそくてある御しもし
義云在業して大膳大夫ましてこの森併せあれま
のおきし筆なりし女のてあへてしなしひ
とし諸し事のなしにふ當ゆいの女のてあ
御らくなる一しし
なれし詠歌なかりひなくなくしさき

もかゝせすかたして　さゝの神の前の梅枝
ひくや神子　求子　あらはれ女の舞の柳色
かつらしさかりに千とせとかけしよとは
すくいつるらん
楽すこし一段　以上哥
神前にしきあらたに給ひて　かけしにて舞人
御前のまへにつく　かくて其の舞へ　和琴はすゝめ
竹のく
松　ひらく楽あり　今もつて千代にふかき
こゝろよし
哥　ひらいに　流楽花なり　あらたに千代を経る　千代
新絶え　譜に　一並ぶ今　調べて終

かまへ楽をかなでつゝかへり
フつんしとくるゝ
地　和琴はいはふとしのさゝへらさ
来る楽の調べ
哥ケ　和琴琴のしらべしき
来ヽかきくせりし　袖かさしてかかへり
うたかたにつきく　来のまた万年へし
ひかりの松ともいひ　哥　調にけり
かくしすかなさの流れなり
千　和琴に有事　こし
哥　蒼梧　行操し　人ある
以　和琴今有　九たまめくつゝみかな　松
すくなそのかく　ちら操を　さそつつかへる

とし〳〵
御法談あるとて云　すこしかきて和談ありて給の
給へり有へつらひ
式筆ありとかく云事なし　以今有
詞く　菅給へりし
和哥共の不審一つ給へ
まいりてからまいらするましく
答　和歌に年れ中納言の事也　右衛門督
神楽者令会人　自是れ揚給の　右衛門督
へし　此者殿者の　株鼻して　高信と
公卿かしこく　洞をさいてくらしと
上手詠り　多く　和歌しはやのなる
さてくらへて人いうしらすとて　以下一つ

いかてすくなしてきのうたとも
内大臣の和歌のすくなくてさゆゑの
申つゝくしるされてこそ
かゝるくもいかにも此申事なるへくて
此申のみありとも
業申てん女しても此まい
こくかるもちゆき行人口への御子細申すし
あらはしくてすらん
いかにもしく事をかゝへてしく
申つゝきの給ゆゑし行けし
業私無いてしく申事に和歌ていく
御いてし親への御ものありけりとて
いまは内大臣殿申すへしみつうちとくし

とかはされて　此いつかはてしといふこと
へつらふ也
世をうらみてこゝろのうちはうらめしくおもへり
花　おほつかなの思の詞
細　其ころのこゝろ内大臣のわたりひとへ
おもへるなるへし
秘　源氏の心のうちにおもはるゝ詞なるへし
弄　玉かつらの詞也　さても尚侍になりて御房
事　内大臣の御方にまゐらせむことなとしてあり
かくいふなり
あはれにきこゆるかなしさの　秘　誰もかくあはれ
あるまく待もてなすらむ事ありて
弄　此中にも御ひとつ心　此まゝにかくてあれ

よくつゝましう中宮もはつかしけれは　さては源氏
ありし御身のさまをなにかとおほしめすやうに
事　大臣のこゝろの御さまに事ともかくや
四つのいほりおもひたゝしとおもへはさるへくは
奥のつゝ事おもしろけれと　弄　さまにまかせ
ゆるして
ゆるし　花　こゝろもとなきさまの詞　秘内
弄　源氏の詞　云々　ことはい覚束なし　此心
人なるへし　玉鬘の御詞　さても
秘　覚なるとも　いつる不審　さて
とかくいひなさるゝ詞　あるまし　云詞ある
あるへしとも也
弄　御中にいふかひなき也

は[illegible]
筆上の紙[illegible]こゝろのまゝ[illegible]して
の紙に[illegible]奥中に
[illegible]
中[illegible]（清）[illegible]
河圖書　裏書　累代之御物被置所也
和歌は[illegible]今紀
出給ふ[illegible]
と和歌は[illegible]二神の御代より
[illegible]
[illegible]天照[illegible]
[illegible]いふも[illegible]一紙
[illegible]

より和歌と[illegible]
いつとなく世に[illegible]女巫の[illegible]
[illegible]
[illegible]署官[illegible]典侍
[illegible]女官[illegible]和歌[illegible]
女官[illegible]
又称同式[illegible]法師[illegible]
書司[illegible]
[illegible]
内[illegible]和歌の[illegible]
[illegible]
帝書寮　女官[illegible]
書司女官[illegible]和歌[illegible]

すうなり治楽先のそなりかしよろし事よ
なかなりけて ふるき袖のふところより出たる云々
比出来し 柘女 或 宇多法師 名称く
和琴の濫觴 諸説 岩戸前 神楽 ありて
らくは張としていはれしかしいふらむ説
まり
一説 伊弉諾伊弉冊尊 作りてまつりて
日本紀には不見 已上等
こときりのおや
枕 和琴を元としておかまへて物狂ひ
その中にてもおかしうつくし内てまかせ
河内大臣すゝみてける和琴の上手と云
されも封らうの尼入てくらうし 双つくらん
いまく露なるなりくらべて帝しはつる
伊勢かいとあはれなる[illegible]
栄 円大臣のかすもかくつかまつりて
こんなりし
栄 根合 世ことなりけるにつきて 御遊の
和琴はにをりし 五つあはれてくもつく
やうやうつく
世にしらず 栄云 此和琴の事なりけれ
人々ほめしくしけり
ち世まうしかれ
和琴あそびてまうしくるとて
つゝみて
てらしまゐ

ぬ　むかしをとこ[illegible]ましまさりけるに
有とおほしく
哥　法華経の人まゐりて[illegible]
事のかみ[illegible]まさしくいのちまし[illegible]
給り
かくすゝしきさき　かゝる物の秘蔵なかし
川くさ物なし
さらはもろくひとり
哥　此歌云　此月十五夜云　おもふ事程也
さらにいまた三説有
つまにふかく[illegible]けふに[illegible]
作りていたく物をそなつかしく　後のこと
さらに[illegible]すゝむ

云事也　世の情に[illegible]ハ事
きぬをきて[illegible]人の大臣なり[illegible]
小臣なり　是は此情へもちゐし事也
さしては八分の分の読誦わたくし
秘　深ふかくかなし　行の秘をとりつる　（又説　哥云載之）
こゝろ（ことのはのよにさかへものにはあり）
哥　秘云　人の心も事ことはりもありのなかまし
[illegible]　章ことなく　已上哥
私　此歌はおもしろく[illegible]角まくし
さらむとしも
子　秘事なりけり
むかしをとこ有と云詞有　此の神[illegible]
河　むかし[illegible]経程[illegible]

私按するに　[illegible]　[illegible]
[illegible]　新しい本　十巻　拍子をつくる　云く
[illegible]
[illegible]　本の　[illegible]　[illegible]の　[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]　大后の　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　有[illegible]
無事[illegible]

箏云　上り二つして　大絃　同　柳[illegible]　張シ
并一シ
又無次の絃をし　無く事[illegible]有　一つ[illegible]
凡可千夫亦未り　呂無事　[illegible]有　[illegible]
手張
ぬきゝ川の　[illegible]のやはらたまくら

河菱　貫川（催馬楽呂）　ぬきゝ川の　せゝの
やはらたまくら　やはらかに　ぬるよは
なくて　おやさくる　つま　拍一
おやさくる　つまはましてうるはし　しかさらば
やはきの市に　くつかひにかん　拍二
くつかはゝ　せんかいの　ほそしきかへ　さしはきて
うはもとりきて　宮ぢかよはん　拍三

むめさき川のちのはまへしさハ日柳といふ人
まさ下の女にたる君しまへいてそのうちは侍り
つまつりにて〳〵へ侍るなり
みなせき人の妻ともにつるさ川のか詞りをも給ひの
おりけれはあひまへらせらしてまいりへけまひ
ちらワしひ行てしに事かへし
子つ申し〳〵けり
こらしおほかいおもつて〳〵たまつりおりしを
其たみ子いをまつりのおとしうまへさせ給ひたみき
そうして年かかりの詞まふと
みまつりふ思しにたまとしいて見
一都松やさうつとまふ御身あつつへ給ひしかな
まつりにゑ給へらしてさせ給ひて

松さうめ侍りたまはりまて上のおほしけり
つらくいてり給島よそくらん篁載
篁云和歌に謙の君してまつらん
貴川ぶの欽略よ言くいつし但付黄也
京ありておの御の川もまつりておいさめく
みつりおくへてまつれんとつねてまつ
松やさ参侍る　第二段有
御の内に立ちときたり大なるかりを
侍てそ松井の事ありおもつてあしくこまりあつおは
ハしま
篁云おもの時如き子つとして詠み
ふりにしめてかのおもは侍りせさし

侍りぬる夜のそこはかなくおやなさるゝれ
ゆかしきまて
いてひきさまく
箋 御の身いて 箋 厭乞 紀
さえてくれかんくるかな
花 夕也
松 一切の音の くりかへしてかきならし
おもしつ人の音も
箋 一切の音楽ありてくりおもしろきありとも
人中の不能をはつゝおもて楽也
弄しての器にてはかゝしつゝのあく
の器なくして
さりとまへ

河 想夫恋 平調 又ありて手くせ無楽をかり
ふかき女ハくもりつゝてうしひらくなく
即向台来弾一曲 羞人不尊相夫憐（千載佳句）
箋 相夫恋 平調 花 唐書ニハ相夫憐トカク
ほりしハ想夫恋とよみ内てかゝせて
すへき所女のいふ川つけいつて
箋 無楽の女のうちにかくれ
つくしさくるにつゝうみ
くのかうらにそうて
おもおはて
おとしゆくてゝ 箋 松 ちまされそ
詠もの人参しつゝ
こなたのうつあそへ

玉かつらの心

む（かし）くるしくもわすれむ心もまた玉かつらの
かくし　箋内

ゆふかほはきこし女め　詞　王女　手絡め女

箋抄　三位中将の女なりしに　箋識く

すこしまへにかくれしに

玉かつらの君かくしつゝまいらせ

ちゝにかくしてすゝみれは

本　玉かつらの詞源氏としてあはれむ

こりて人の家

箋　玉かつらの詞なりとなり　箋云　申し云切て

ちゝにひきしはなれてさとりつて

新箋　ちゝにかりそめにいひにくきにもなり

といふまて玉かつらの心を詞といへり

人かうらみも今はしうちつゝしすゝめ

内侍も中よりのちなれはいとかはりめ

しらねとも玉かつら詞へ

せし事なりとしるへし

あしくいふへからすして　ちゝは玉かつらの源く

源氏は太政の事なりとも人く源の

そちく玉かつらのいふ事かくならむや

いしれるひかりをつけしかとしく

ただまことに玉かつらの詞して　玉かつらの源へ

みなまつ詞也　玉かつらいかゝ給ふやうさしたる

名をの高きにこそいかにして御身の和泉守か其そ
くわさ御めし参りてさんらへ給ふより
三すけ縁有りけれ
もうしてましくて御身のうしゝ候へ
くすこかうりたく之かゝあるへし多かせ候へし
あくきうし
むこ扨も御身の正直のきみの詞し
手御身の神のあり事し　扨つゝみ入て
くらはゝ給ひてとりなさせて　聟河海同し
ねか御身のそこに人をさせまゝこらしめたる
つて大さまの御恩この御ちかひ参らんとも
さのくらしきてまもりまし
聟云松の緑のねかひしとまちゝ申さんと

平下のてんちのあめのうちにてかゝる
武内宿禰再三かつみたまてい人なと云
とまつるのみへくらかりしいさかひある
めくらかなるく御身のみてまつりとらほ再つく
きかつとこいりてのまかひかなおほしいと

うもしうおりて世へくつの
松おもり有りましく　聟御身の詞　瞿麦
前かおりし
いつくむかしあまし世いなれさ
聟松まいつるの事なりつゝけり
世へいとつもりかかれ
松世まさくみかれゆかりし

いかにしてゆめのつゆとそなりにける
むらしものを夜半の月のかけのそらになかめし
こよひのまくらにしもそおきける
持（?）むかしを今にかへすよしもかな　　右
わすれしとおもひしものを
左（?）夕顔上のかけにみえつる　右
かくしこの花のしたにやとるらん　人しれぬこゝろの花のいろにいてゝ
持（?）わかれにしあとをしのひておもひいてゝ
内大臣へのかはりに　夕顔上へ書つかはす
おもひいてよ　あさちかやとのつゆのまに
左（?）わかつゆのゆかりの内大臣へことつてゝいひやる
夕顔上のゆかりのむすめにいひやりしに　これをみて
らうしさまもあはれにおもひけり　右

花　女房歌合判者　順
ゆきてみるしらぬ山路のさくら花かな
としのうちにさきぬるはなをみるにつけて
ともしひのかけもさやかに　夕霧とかけかはしつゝ
ちりのかはのほとりのはなもちりくるゝかな
つれなきはなのこゝろにそ霧
世にふれはしらぬ涙のいつしか内大臣にこそ
ひとことのいとゝおもひのまさるよしを
さらにこゝろのつくることなき
世のなかのさかりをさかりとおもふ人
花のためしもいかてしるへき
持（?）いたつらに花をのみまちし
いにしへのはなのいろをみるにつけても世のなか

さくもとつのいはれあくすてく
弁新篤ろの母くらいな上書く
む芝ハ新ろつのさしゝめく　みよしとも
くせりわらゝかしてきゝて
私りう弁かか気らは紫識く
ひろのうえ候にし様のむかはてしと申てあのん
弁新ろくしてうへをすの平かりしかうて下向
又平下て
秘残りかゝ世にも平かりしつさく
む新つゝのんかんハ主との書ますくに内裏へ立て
かかるあるとて申ん非もうて由わかし給
つしとのへく
かうしも口ゝ中にれし　新参のとく
こさうゆかしくわらひし
御の新しうちて
むわ分かに未也ねるて　弁同
紫ほ川三事新
らハ非とも御のくかねくハかゝるあくに云
ゝとわうへてせしさうん
之もろいまかて　御のたい
まろしと中に書し
新つゝの事く　御のれハすゑのく
らかわてしもか
秘しかりいしと思うしに　さく口つ紀入
書御ゝ御りてらしゝ了ち行て
さまゝて書紀志がかとゝつ

こまのくさゝ海はらいて上ぬしさへ
さうらふ御事よ
まして事なく
松 宮りは世のわれしく義かし 松 宮く
わりご葉しこそしも
みそらくあくいかれまつゆしく
宮 さくら御のふ中りこ白くのぼまく
中さいてあらんこと思いしく
さしへ女ゆ思いしもさし人のかれに玉ろうゆ
いひしこに世して御のこさのいさし打かはりく
玉うつゝの折もいかそしてあしくとも世人の
さあはい玉うつゝのゆく
とりかさ御はしいふかしさるるゆくのは覚

くわし
宮 松 玉もらへし宮らく
とつらんかし
御の玉うつゝ袖りつのぬく二つさ御てし
宮上おりしめいえ思いしへりくこひきう
いけつて
ゆくものをとりもくつしかくに
宮 かほしかのゝ出わしわのゝかしんて
いつしものり
松 ゐるくの屯ましくこ世も有御しきこく
又しかあかいさん人くしこひゆかれ
御のうらかゆ里ゆくし
こゝ人のかゆへ中ゆり

御の一の人はくりすへくわへてまいりてとかくにめて
ちかき人あまたさふらひてかくれんとて女の
なりけるを宣しはかくのことし
ちかきまいらせて御前のかたにおはしますかく
さしいらふ事なきに御前の人あつまりてし
ふくらうひきへるかなまかせたはるは御の給へる
おほむかしにうけたまはりて我なれ
ちかくまて
おほやけのおほきにまいるへし

箋　蓋いふ論思也

ちてとおもはいとおほしくて　河　引率（イサナヒ）日本紀
なほおほやけのみつにつきかへてハや
花鳥説いへし

箋　ま人のつゝしむゝしてはよみゝ人にそ又案
御ハハくいつこかるかなとなと
花鳥てやとこそおほしくて我ま事いさゝかもさらにいはゐ
御ゆかしさのきよらくおほえて
いねしまてまいらてもしてくみるとき
ちかり
まいりつるのかしてかねてより人のむへきてあり
みてくいとしかかう事にてとまいらせつるの
ちかくさんまいらせやかてし御の事ありある
ちいさきかれはなれかしきかな
こくつましてまいるまいらせ
みえし御のまいらせおほしてまへな
らひまいらせけれく

今さらにいはくく　初なし
思ひあまるも
くてもなかりけり　河　平（ナシカ）　日本紀
御かたちいとめてたくきよらにて
九こそもえさにせもし　思し　命も
御心にも　あはれなりしこゝちして
つひすくせもしらてしほたれて
わりなきまてとゝのへたる御気色とも　思ひ
とし月のまゝに　御中すくなきなけきもまさ
宮ハいたうなやみ給ひて　人出さし
ゆはすゝしく言はしく　御うへすこし
ぬ　あやしかりける御こゝろこそ　らうたく
むくつけく宮す所はさくらも　出す所も　[illegible]

いとしうおもふ心そありけれ　つゆなき
[illegible]母君ちからをもしらむかすして
こゝろ流れ[illegible]とられすつくろひをも
あくかれ　おのつからいとみなかりしに　宮す所は
ともすれつゝまのめつれてとも
あくまて世かはりぬる　あまりて　さ
いかさめくいはさ　世かはり　すこしめいて
ふるき御のひかりて　いかゝとかくのさみにうめ
さかりさら　いとて
とみつゝ　宮す所　うたてくして
む　人てる　て御たのむ中　こゝと
河　人ちかくの私のよくゝ　宮すくしいらく
ひとりこもりきるん

箋云　一禅云　冥書とハ書なり　ことに御学ひ
まし事とハいへとはかなしとも此書をよむに
人もかのかくれたるを
めみえぬ神なり
世にあらはるゝ人つくりをあらはす也
申おくへし　見出されて
いふなりきこえ出て
わかき思ひ入給ふもことはりさてこそしかし
河　けふといふ心とていふなれはおもひ
入給ひさもこそあらめ
弄秘箋引歌同之　　秘　草紙地
いとをしいかにそ

箋　めてたきかんなかなましかは人事ならぬ
外ならぬ
いらく中出ていふもいみしき人
年月に一所にしりてもまさなるへし
御の心中に
箋　中くの思ひへ　こゝろへて
まのかへしおもひすくみのゝ
箋云　樋をかけ　云くきまへて御の心ちせ
そ事をもてかへ　三の柱木のおほ
いとゝ思ひ入きこえかりかへて
ちうこゝにものゝかりそえ
まく事のくちきて
ちかきいつしき　箋　さしの

物かはとてもしるくてみちしるへ一夜給ふこそし

比くらへ　浮まて

内のおほいとの　蔵　給侍し

今のかくすらむ　蔵　をしはかりて　桜同

致の人しも家のうちにあらし

内大臣の家中かくてし　世　もしたかひとくく

中納言へしらの事聴し　在るしも

世のかもかくさしたる事も

辛きけくしきん侍りしかくるし

故　かりそめなる物とし給ふ　物

蔵　弁の　かりそくしき事に

はつしけるかなき給ふ

かのまへらとのつゝみてかり　少弁御教

蔵秘　勝のこふところし給文　物をまへのよう

給ひてし

こうしみのつゝ　内大臣

さうしかいてよくかけ給ひ

蔵　色とらう　内大臣の給　蔵　侍し

あのつかさしてし　詞有　むつかしの

つかくし

こりうつむく

むつかしの事　内大臣　ひとつ

えとしかてまし　物しかく大中

世こそ侍りし　次のかひしも　侍つかい

しかし　内府の事　つまらく　同り

きましく給ひせ　わくかなし

さうし御はしらへくゝしまいらせて　さしまいらす
菓　うつふく西向く
むものゝ紙より上へは中く　かはしらにも
さしまいらせ　西向しき事
すゝ御めのまいり　内のうちへまいらせ　内府の
御はしらそれにて封合にしゝ　おしまいらせて候へ
ちゝめてとゝへ　押く
御おしの無封
菓　玉子かみに菓子をつゝみて　御白
御はしらかいにおしまして
菓　梅り　大方まちかくすれてまいらせ
御はしらへくし
いてまいらせ　菓　いての紙上よりいそし

きゝまいらせて候へ
梅　内大臣の紙　御めの西　さしくゝらせて
すカわらくし
くしまいらせかはしく　おほしたまいらせまし
これにもつくる　玉つくしかたくし　三重くら
ちかこへつきつけり　書まいり　さてもかくてし
おりつ中すおりてハさしくゝ　申すまいり　わくしとて
あまいおよく　そちしてつ出　無世り　三すてつ
む　菓しつかはり　くりせくし　わくし世ま
こゝろへし
御まいしきたくし　菓　枝　宮より給て　并
む　おまてしき　ちくもへ　かまでなこし
御その　くへたちゝすべ　内女絵えいく　つけくる

すゝしくなしくさすまいて とふさるなかりしを
かゝりきたゝめのゆゑの縁 かなはせ給ひ
えてうたく今よりふうし かゝりつゝおすく
ふふ一もいへ
かくてこしよしき 宮上おほせり こよのかせ
申し
翁大すなはち ゆふく かくて 師の身のいく
一つしたる事おおさくれしといて
ちつまとつゐてくハ今りきしうらハおなかり
此世をなさてうちハタとく後いて （上音）
とゝしてうかまて
おもり雅あらても 一首の女のとこかハ
くいてて

その今様名ぞうてて召ハさるゝの ふこ
ゆ實のてる 翁 玉のしくや 實のてこ
有まりたく
さおの給ひ中し さるを おつゝしまうる
御の事し
と申しらき御く ゆえ下も
さらいて さゝめてお おすれ 玉のつゝ給ふ
大しせく かくのやうにいつまて 中あし 御ん
そとしも
ふこなへまりし あへてまいく
ゆるて叙へまつく 給はさまへも

薫 おもふにつけ増りことくまめ人〳〵しの北の方と
なり給ひ女二の宮の御かたハ御門の
きこえ人〳〵しも給へるに
人〳〵しいひきこえさしわたらるゆかりのひとしきなり
人〳〵し
す 薫 ありし宮に参りて給ふしゐのひとへ
とに御めをとゝめくしかりきこゆ
むかしの宮の事
薫 宮ありて 如花内
あひたる折しも二のみやにもそこはかとなく
いつかりしもそれしも 卅八 にいとゝかく御
切なくし
いかなる御かへとせすこしいかなる

薫 ゆかしかりける人かな
私 人のおほかるゆかしかりけん事の給
しなりけり
侍りつるこゝろさしのなかりけん
む 夕霧中将のうちはてしやうの給
むらしく浪情にさゝめんことおもひ給ひて
薫 夕霧かへつかしおほせまつりてまゝ
つかうまつりて 如同
かへさせ給ひけりとて
おしなつけかりけり 夕霧のたまひ
内大臣はかりてまはりてけるに
あつくなさけしのびさしのぶ 卅八
ありそくゝゝの

ん世にしくかんこかくかはりかくしおほすた
内大臣のん久ちりのこひしらむかまし
み様りの様くらうのこ一中ちりの事も公除
かくしに思ふれしく帰すなかく中将り空のら
とすくもおもわりつゆく宰相ノろすともく
つく中くん中りこひてゆかし
中らもとすくなかりつきり
藤内大臣のこん中りさゆくこひそ
こうもはあすらかうつもとこひそめ
ろうあくつおいしはしもかしきくハ有こと
そり
あ二宰相ノあまくえてつましそく
又内大臣のこひてうちわたく宰相ノ御方

一つてつむくみまつて
おゆてらうまり　弁　おゆく
非あたうハひいりしきよつれて
うぬるそてあゆく御さくあしくまさうる
宰相ノ宣ゆふ御く
あつりしくハさしん
前しぬをくゆつてきむかいつもしいみゆ
まつしりくく
もありあつわりりうてちてそくかたつしく
まあつりあてつく
くくも　宰相ノ中将ことねくくもう
中としく
あつくもあしとまへつる所

蓋 内大臣と
行ふにもかくえおはしまさる
立井ノとらへて内つら被ふ
うたゝね いさゝか時ものみ
河 寝（ウタヽネ）ハ（ヒ又 人清又）又 假寝 荘子
まことにかのおやのいさめしことはり
御息所のつゝみてはかはかしう
蓋 いとゝかなしうおほえけれはあらくしき
しはしはかくて出給ひて 松内
川秀 しらぬなかくのかし 世間の事も
私 今も井ノと久しく中の命も
耶とらえて
女く今はつかうまつらんも

私 さかしらなれは手ふ
蓋 内大臣よそにめしかへし 右 源女の御心
今そたて 服給ひ手ふ
さりとていとさかしく手くかく（カ）
女かへしさまてにて人もきこえし参る
かくれなきてくれ
行云 とりそくへのまもられよ
不動尊陀羅尼慈救呪 素性曰世事
不動 鉤索印（或刀鞘印）
蓋云 おもひやり身なりくわしのまゝに
行くうち仰給ひて
うけ人々もし
可 いつもかう人々のうし

若松　殊更のへ有しさしハさるなり
いへり　くちあらし　好いへり
きこえけるをとしかなりし
若わし　非植物　松
なと侍るなとりいとこれかわりなく
慈若いつらなしたるよし
松后りに后りかくよりこへて見
ようしくいつもかゝりて
よみかけるよしかやうにたえて
きみ侍りしたしくかはりて
ありしと
いひくもしさえ見えつゝしかれ不成
こふ及ふ侍中斎のこゝろとすへし

松　うへしもそのかたの年々のくさ草も
見え京えからの見　年の高名もくらう
ここに侍るへき
松　こくしきあらん時のくちのめて
事なくし
かのくも古事ともいひて
そもの大臣の評判也
年としちらして来る
むかしくさりくありさりとかしく望
こゝかりけくありくて思つゝくに文
ふるからもおもふえしくふかまへ
あしけれかぬへき　わかしきかくしく

こゝろのうへに[illegible]つくしけれ

成長（たいけ）あらし非見も　秘用

あらしも非見へ入内あらしあらん内事く[illegible]

[illegible]しあらしゝと内大臣[illegible]

ちりぬすりそもてなしん

む[illegible]て宮井ナ[illegible]のて[illegible]て

[illegible]宮井ナ[illegible]てゝくめんす[illegible]て　用秘

[illegible]しもとらんと[illegible]中より

[illegible]の事ん[illegible]

[illegible]　秘用

いつくく人[illegible]つき　[illegible]

久[illegible]りすゝも　事ん[illegible]つて祢り

[illegible]ゆきるんとて内大臣へ[illegible]

くさひとに祢人てつかへん

[illegible]の事し　秘用

[illegible]りくてゝ[illegible]すくもしくさ内

ひくりとも

[illegible]識し事あらく人へん[illegible]つてね

[illegible]のゝくさ[illegible]事り[illegible]

[illegible]

くそひもりし[illegible]くもして

む　人へんやこんとくこりね事も[illegible]り

いつり無[illegible]へし　此　祢宜事言

りくこひより[illegible]

手[illegible]一[illegible]月く

此言　祢くこひ[illegible]こゝきしせん社[illegible]

うつしみの枕かみなり
せしへすまりにも
もして宰中将ん
せしいすみのおおてかうして今ちん
こうしてくうてゝくてしさく
家宰中将ん
し女方うちの加こしきうみの方くへ以言
こと人今てしうてくうちくてまうくしと
いかしつわしこみのさりて
久むりのむらし宰中将ねりうくし以お
つし
いつくさくうしさや井ナ方ん
ある人しせまりかはつうて事お

云宰中将ゟうらかくてまうて
かくゟくまうつはくましくく
家祖母の御弟一言ねまうきし行
事もわくゝちてまうし又内大臣ゟすし
おくひかのくいかいお姫君
並もは君ゟすしゝ乞くゝハトもは君の
御めるに
まうちゆくいてゝさうく
ともえんゟんをさしゟてつかるとゝりゝく
してさいのむちくわひまいりりはて
御かりくてしつゆくなと玄ちりの
うくゆつうへてしとるねししくゟゝ
まわくしとそもは君のめの内大臣のみこ

作て

とおこゝのあり

箋云あるはけらくりてして

うすかつのすくねし

くてゝしわりそめしとうかゝさみえ

らありしのてく

女内のきなり

箋　弘徽てんの女御　私同

ことくの事なりし

さうゐくてかゝのわひらはくかあれ

つゝきましひそへて

わしは[illegible]人

内記[illegible]まてし[illegible]

おはしめし

かういし　箋　女御の[illegible]意　私同

さひしのわりく

箋　三條なり[illegible]

中しやうかつの[illegible]

[illegible]

[illegible]

私　紀有つねの[illegible]

[illegible]

[illegible]

女は[illegible]

箋　紀有常[illegible]

[illegible]十[illegible]

くく候かへくさしけ申し上候
しくまりてくまじかあへ在後同女段
是くく
あくかくさしのくへなくへゆくしてゆくせくこと
もとくてつへくへしきりへ
松　皆うちくりてくさかりてへつ
しくく御前へつくへつくそ
花鳥流れ
女　皆てくくり處ろ大し女十日へり
くかれのさしきてたるとふし
新なき流れく　己上女
花　内ちれよのくのくさしのくくて衆
みへいつまひへけくさかかはさる事に

さく八ゆくしく申すなりとのしつ
われ申ちつとくてるへるへて申候
われの事くたとふしくるし申申女御て
みくかつて
いくるしかり
もは是るくくへ御てかくして女御のさ乞ん
をつしまりきし
はしいさ一日て　女　女ゆのく事なし　門松
れりうて梅のなる
以後引て七くロくにて梅の花うれし
こゆたかふとれてかつしかと
仏きまいん女なみつうつもふくかへは
すのとすかなるとまし

つかさめし侍らせ給ひ　かへ（川字かとし）させ給て
新大納言三位白とましたりつる梅
みつからはなかなか有こそさりけれとて給
つゐさせ給ひいつるおほしもとて書せり
くりかへしおほえさせ給へ
内大臣の人中せ
中納言のゆるしさいへて
子中納言の御おほえかへしとなんさいへと
ひとまゐらせ御し
ひ宰相中将中納言の人々しといひて
前思しかくそのみ給へりしつまく
は内大臣女御へ入らしめし御へ参し参る
少一の播磨守ありし右思するへきひとくそう
てゝこしさしていへとしんてうのみやん
いつて中納言のあなくゑひせん青
御もくくるつ
参内大臣女御へ上て右御へ権大納言は播磨
すくしもり加賀右ひて給へしてる
左大臣中へ参思するへ女御しは思ひ給し
給つるしかへしきいへていへるまゝ
上の御り中将のまゝ思ひ給ひけん
しを御給ひてきつ
いしかりけるしんのとは給へれ
参卅一右とし給へ　まさしくは思へ
あしつ年さしくの御てまつり給ふや
中らくはあなくてしかり

紫　内大臣の女御のかへりことはしるしあまく

さまさまにことわりて（如何）

紫曰　女御の今上之后のまつりことはかたし

かゝるかたにはうちつ中宮の中らくなる女御の

ゆるされさせなきこと　世気の御かたしけなく

のみやうゝゝまゐりてまゐらせて（如何）

すゝみてこゝろとゝもにかく

紫　奥にものゝ御ほいも御まへに

むなしき御よとなく御なんもよろしきかな

めつらしくなく

なにとなく思ひいつゝかへりて

紫一　袖を　よそに思ふの本意もなし

紫云　万葉

さまてかはりつゝ人

紫云　世の御なりにのまひぬまくとほ

すゝむるつかふまつるうらみて御ゆか

山風遠路のゆくさきのゆくゑの猶あらし

まこといとおしきそらのいとなまし　ていうしく

なし

此小蓑（初瀬）の　ちかひのさわさわ月見の覚し（同様）

弁　あやしきのさいはいとまつりつるかな

紫　きし思ひて

紫云　めつらしき思ひいつる事まうしきく

ともよく

弁云　なにことはあらいてのさいはひこしく

きこしつらて

義云　此梅をさしきくしたれとも世上に
まよひく切りおとしてあの月をも見るもとの
一とふりを
まさにいふとちくとふを　内　吉平
あかくしてうけ給はりく
義　又曰さてもさても中々
さりなかうけたまはりてうけたまはりて
義　上はまて松の数今須ゆうても前と長
きかなりきんしはすみとものうの紙
見てうけ　義云　松はれし
無用してたいきうふかる
松　こゝめてもうかるを
めてたく

松　又用をちかつきあひてのかたら
こゝ申く
義　式く　弁曰　義経　ねうふ中さ一し
こ御年へんく
こゝゑひれくて　すく　竹の前
まれの御ちらいてんく　まつあるか御梅く
申り置してれくすんくて
さらひし中らの中りうしふわかいう
くらこなうこひのうこゝも喜きれ
松　ミし云くすく　弁内訓く
秘　いかくこゝりくすく　とかし云つき
来世へてありれなめみしこのひさ下る
同い中をめくし　さいはひともゆう

いろまてうつりにし山田ひくてつゝき
さゝれ石も細かの石なり意くらう有也
いはほへことか之ゆへにいはりといふ
ねは中すかりくゝるを細く成也
よりくひしらつけり（但）
ね一説泥土をつゝみて下すなくし
さゝれ
蓋同さの宗く与門
すゝ寺らんに下すしさるひとひのもの
さゝれ石に
ね此ゆゑ不審
ふるきいしくつゝしろかねなり
此哥云の古壹の風あり今まて

苔むすの類説あり
墻正八幡宮の事なりといふこともあり
きしの石につゞきかゝりてつもりたるを
巌しいふなりといへる也
一説かたきやうなる巌いふ
柳も姓氏の御ことのやう注するへし
よりかくしつる
むかしのつれのいひしらなかの石
ふるの一説柳なるし伝へて
ね此哥後あるしいはとてもつもりぬたる
ふるきまちしさりし
蓋ね云ゆゑかゝへし
此哥亡云の古壹の縁あり御く今まて

宗祇の帰と百首よし
こりしを思ひよらるゝあかつき侍る也
しるへし
一説　深草の心にてみる　歌つくりて侍る
其意の我き雅俤にうつりかはりたるを云ゝ
思ふにつきの説　猶兼ね云ゝし
草木のうつろひし云し
然らは末の方の　四段ふりたる也　苦わ
ひとへにかゝる中将はく
歌のこゝろはさらに播く
しるへのかたはうへき
世にし言とおもひあるへしとそ四一下
ひとしかりもあるへし

抄　秋の夕ハ物ことにおもひまさる内にもとりわけ
うちつゝて
抄　おもひとよめる秋ハすへて何とかくなく
ものおもひなく
その人ハ思ひ比なる
抄　秋の夕ハなかめとるへきおもひ思ふるに
おもひしらるゝ秋の夕のかなしき世にも
なりて
かくて其
抄　またいにしへの事をもしのふ
ありしにかへらぬやとにハ物をのみ
抄　荒れたるやとの月に
昔の事を思ひ出て物おもひ

あくまへとさらり封のあるましく詞給
なさる御つて
答云 世へさらぬすへてせんかくに封く
つけにくくしてしくせにあらく
内大臣詞 くねく しくてはさつしかく
しけれとかくもさせまへて
事あいきくみつしめくく
如 蓬とくすりくひ申してすそうし 手向
答 内大臣高職之設 古機之脈く
きくみえくしまく 答 年白見く
くてさら悔しへ八かすのゆゑひら
答 年白見みては 如
ゆかしとひしせへか

其内大臣給 今此ゆかしく ことひし事
すこしのくみつらし 侍る
河向掌 事事給 答 拘當給
とりしつて いくしてとへとへ 侍なき
しをいた家 すまみすり 其給 ほしく
らくしく 其ささへくて それへくれ つまら
つまれをきくし
一段 如云の妖申すりのて 封給 ときゆえ
なすりめいゆ 如云 みつしくて さまし らしく
いゆかしきゆ
ゆ候の一段下給 かしきや
其まく下給 如云ひり さまのくし
如 仍候の段申給 如云みんかま まてし給

くらいにてもかんのおかしく てふりてあはれにこし 所々
業河混ぬこゝろにまかせてあそふしるし[illegible]
勤て 桂かたるも
桂混の文詠されの作の事し 今は移りて
それ不寝をとしてさうしも奴とへの湖帆に
ありし合かし
東坡か[illegible]亭記をうつし　新都
喜雨亭記云　踰月不雨民方以為憂越三
月乙卯乃雨甲子又雨民為未足丁卯大雨三
日乃止官吏相與慶於庭商賈相與歌於
市農夫相與忭於野（上下文略之）
すゝりの合ちゝくつましくて[illegible]　業内[illegible]詞　同松
えらしも有御しきさゝめりけり
業冊一句子細きこえぬ 末の句いまて
とゝのひさうる也せしさとき ひとしく
書むくりきしなかう語きうち御し
いくねうなしひかへのかつぬつ大
ことのまゝ哥冒て 本句りこそしかよりの
あやしとおゝさり詠の作樣こそあれは
めしき事なり詠作とゝへつるこそあり
いとくるに句のかれゝの句女しともかく
さらんともにもしこへ 詠りさるひく
こゝかしへ作のあとも歌
えてのつゆありく
こそろのくもるあはくれゆとし

ゆてしろさせむけりつゝ

ぬ ゆしてひなかしいゝん ねこしひさし

まうそ もはこゆにすしかにほのくるかく

ゐなとく ゐへゆりくさせしくしこる祐の

ゆゆくくるくしきゆわゆゐゆくの寺とも

そひこくのかく もはえゐくこゆし

こうしゐくさくしか

万 もはこゐなおかくゆし

すゐつゆくひとくしく

ゆ すゐうゐひくく 万同

をい もはえゐ綱く ゆ同 万同

ねはこゆくつはらゆし

ねはとくとしつ綱を 内ゆ寺の くる 一勘

河辰壺 ねこしこ前ねとなは大壺ぞの

仕丁くゝし

む 延喜春宮院式云大壺一合こし

今案ね便壺ゆりも

万 新う 飛騨ゆすそ ねほこしとき

ゆ大ゆかかはしかは もらとさや 山草ね

ほはこゆくこひしとくのかし

えわんくまうくらつひさしく

万 内大臣 ねゆ門

おうつうの井ゆ 内大臣の君かへ

ね中りきすてへくかへ

新のくめね家わんきのきつの 輪傍へ

竹とくとゝゆしみからす 輪ね 志かさん

とかくまつて
おこかりくせへる松かしめく
顕云 ゆきしきれにや 今あり
或松この侍しきんとむちきるみゆる
私 世俗云まことしるしありてあり定なり
ふかくし
まつるみちのしありありける
松 ちかひある 顕 大のみのけいふ
なし 已上
おもかくのしはてらりこそろの
ちかひの世めし なり松世をも
ゆきほそしみおわきなるへし

松 ちかひありける 顕 みなみ人をも
妙法寺 近江國神崎郡高屋郷内有寺有過
とふ人はたちのはしくも 本尊観音云〻
顕 承和九年十二月廿七日格云妙法華經㝡勝
王經別〻一人毎年聽度隨業為入左近江國妙法
寺華厳㝡勝等寺其試定者始従當寺盡令暗（讀イ）誦
今案 ちかひあるとは このみちのおしへ ちかひある
おほよそのみのりはらさまたけるこれを妙法と申
といふことのちかひあるへしけり
かなし
おもふるへ あかしのちし
顕 私云 さらに人のとかすなりきくならん
ありける あのことありけり

私同

同　きましゝとくは侍りくさましゝとくとて

とつくはさきとき申侍らん

箋　内大臣の申され殿しさせましく

まいりたまひつく義なりしとて候へ

おほせられん大臣のおほしは申しとて申給へと

内大臣のくちまへりけりくいつて云へとて

申さんとくいつかはりたる申ゝ申さんまつらんとて

是ても御てしも是ひ候はんをのゝ所へつかす

さ御し

そのほしからへ申よ　箋　内大臣の申給

人をとしとしられてはわかうきこえける申は

此申らつくる事に申るくつたる事をかく

まゝそのつゝかしてしく

ことゝいゝくりりしとそ

河　吃訥（コトヽモリ）　若得爲人聾盲瘖瘂乃至謗斯

経故獲羅（架）如是　文（法華経）

箋云　私河かりしかし

人さましつゝまてつる　箋　斯経故之事

こゝろにこゝろしきまりものいひかたり

ない　弘云て又の女御の事也

箋　此女御は内大臣のひとつよそへかくしく

おほしらしく女御のゝ事也

みつからつゝむしら女御の事なんめりしかつる

女御も他人をわかつのうちなとかうなりけり

つくりてわかくれしもし女御もしをとさとれ

すらく此事也しは明なへくもして

世継 源経 不叙　下云不定云々

私云 世継并ニ王部中卜しも なくなる人

（まゝ誤テ一字アル）さりけるをかうして心ひとつにおもひけるに

ものしけるを女御のもとにいへりけるを もとめて

ことゝも おもひわかれたるに おとなしきには

女御一人 のみ まかりて かへりぬべし けしき

さるかたに しのひける 御すゝめにて 行ける

ひとつにも ゆかしき人の内大臣の御きゝ

ありけるを不定 御事 さるをも おほしよく

紀内大臣 まいりて ひとつにおもひて 女御の思

きこえさせて 思ひ うへにも 内大臣のそなたに

ことに 申して

あかさまに思ひかへし ておもひける

女御のかたに ありし 行人 なりけり

抄 内大臣 愚 思ひて まかり給へし

いひつるおもしろう ことゝおもひはかりける

まうけたる 物かたり なり

さらにことゝも あはれなる 御歌

抄 女御のかたに ありけるに 御むすめに まつる

つまこそ 女御のきこえける をけさにみ ことふ

愚云 哥ことの ゆゑ 女御とらの御かたに 御

しるまうてに つかはしてこそ 内侍 かゝる

ひとつにて くるひ もとのまゝに 月待のもとに

いとよりて さまにて 給ひ

愚 王と思ひ 詞 抄

かくて つくりける 人のありける 事はつらん

箋云 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

箋云 [illegible] 詠 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

私 [illegible]

[illegible]

[illegible]

箋云 [illegible]

詠 [illegible]

河 法華経 [illegible] 薪 [illegible]

[illegible] 行基

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 内大臣 [illegible]

[illegible]

[illegible]

花 提婆品 採菓汲水 拾薪設食

箋 採薪及菓蓏也

箋云 [illegible] 法華経と [illegible]

えし書て[illegible]にえとして[illegible]侍る
上の句は物によする事の事なと云由也
よりて[illegible]當三昧にてあるへしとも
ごうとりて経文部に[illegible]あけらくとの
法分りく顕れのことなり[illegible]一にはたるの
むしを詞二にりよ前後の句を[illegible]誠如面頭
蛇卅すらの子分にしてわかみる身くし
よあへもわかしたん[illegible]の書ほしおくる
私 吉瘠とうからくてまてして
おことりうつまひからとしてしるお
哥 秘 [illegible]の書おもしは[illegible]のみつしもと覚
から恩[illegible]ねく
おもしきかれるよ 哥ケ 草紙作し

内大臣の[illegible]く哉わしたて[illegible]の人も
かおさまの人こうかくきりて卅よしも[illegible]人
こたりおこふまかり[illegible]くしやうらひ
あきうさ[illegible]
かけつけ[illegible]ん
私 卅内大臣りいたこゐくつり[illegible]し
こうしてえてよくく書りすり[illegible]と覚
きかかし思ひ[illegible]ハさるしと
さて[illegible]仲の女御論りし
哥 [illegible]詞とれハ仲しかましん書ぬ
せひいとく
しうし[illegible]白かしくわへりん
哥 内大臣詞 [illegible]給ひえしかしまう

ましかもかすゝいさよへ切くし
梅　くらはしの中やはきえ心さまて
まとめてもつゝきたりふつしかしか
こしくさしく八幡にのさまに経く
内大臣しつてる御中て
さりとゝ竹つるく
菊　女かくもしう竹よりつとにな寄し見ん
君え千よ天下もし世々にたかひしあひあるて
さりとも天のさはひすてや名にし
わすれさしひの
梅　かいとくひすてしゝなましまてかし
しれはなかの
松　内大臣の御なき　家同

いてゐかたてらの山のさか中　菊ちもと宮詞
あ年とを小家かり
千とせふる家の数々に重ねるのこさまて
内々のはまつむしく
松　さとさ千代に君かやみわかりいはせん
万分なまたく御さく
菊　あかしらう祠　内大臣千とせ宮の猶また
万分なわしさうつとおくらの歌のこほる
山をしわさまつく小忠すこ
松　くゆしきなる中のつい中の条の春の秋
大とよのかきまつのふし
菊　いかな年千代宮の友女かつの春を
ゆかくしてしら

まじはりの人のつらく[illegible]

抄　梅を人[illegible]の詞

抄　[illegible]ふくまひて[illegible]

いて[illegible]中し

抄　あく[illegible]いて[illegible]

とも[illegible]

抄　[illegible]の[illegible]

抄　云　此節[illegible]の[illegible]

[illegible]女[illegible]の[illegible]祇[illegible]

[illegible]秋[illegible]

祇　内大臣の[illegible]切

[illegible]いて詞

[illegible]詞[illegible]

云[illegible]御[illegible]の[illegible]

[illegible]の詞[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]云[illegible]

又[illegible]云[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]人の[illegible]

河　夫の[illegible]や

祇　[illegible]云[illegible]

[illegible]

[illegible]の歌[illegible]批判[illegible]

ひとりはつくゝとなかめ

第 新三 左右紫のゆいてしゆつかく

ぞえしこし

第六 廿巻之中将の北の方の許へ

しらぬくらぬへ女侍した

第八 しらぬ年頃ぬりくさ白くとし

わりしてく紗女ん衣しるへてすゝすくく

なりら

おうしゐさくこ日りかりく

さしふら事すゝこ云紗お事し中ゝ方らら

ろくさきすりくいすやるもく

ろくくとくゝ給りし出侍てしこくら

第五 一上右綱ゝ御衣内大臣殿新御作の上書

くまれくりゆくましく夫紗しまいてすりく

わ紗くりくさ紗しらの女ら云しるてて

とれへ女の上すゝいつなのさしてしく中恋へ

すゆこそくゐるくゝ廿紗り若人へすく

川今くく侍へつくゝて

つまさとしらとひえるほめのうらきゝ

云すらかりくきくり女侍くと之わりし

うゝふのゝたてゝころ与ゝのせすりさくしく

猶すゝさも紗ゆしたししも思へりし

しれりへつくゝすしらひえる侍くゝへつ

而白きゝ綱し

ゝゆへくしく方車ゆ 第三 廿紙不富

新三 第五 廿但不富く ろくこし もゝ不富

わさくり此くらの世渡くらしも定めなき身のみ思ひて
いよいよ思ふかひ以なく事成ることをいて
よろしき事ゆへくもわりなく古へにあはれは
とりわき年月ことさらに心ある人々の
さしもかけ筆しるしたるはろくも
すゝ書ゆるありかへつてはいかに書ても
書にそしつ思ふ心としも書也けりかく覚え
をなしくまつりことはけしあはつりそえ
ひとすらにいとくわしく洋しくてくらしも
あらはやすこしいはゆる
題之
秋夜　枕邊なすなゆかす　わしつゝとて
つくり出あはくしく古人さへをし

ひとしくくらし
河
河逍遥　任考
あつまりゆく世のなかれくる心のまゝに
古こゝろして世をはなれてもの
わすれに取りつるしるなかよのつまこり
すみぬるさ海り
題之　すしをと見つゝよりて
ん門く異く上の詞書しその
ゆとりとこしりしてちれ
そしつゝつかしゝへりし
ひみけくそこら
いは世中きみ思ひはかり
題之　んもしつひしつしてつかくなりの

あつさも[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

河東[illegible]

半季（ハンシ）[illegible]

秋[illegible]女中の[illegible]

文の[illegible]

[illegible]女中[illegible]

[illegible]

[illegible]

女[illegible]

[illegible]

[illegible]天[illegible]

桜　天下（テンカトヨムへし アメカシタ）

[illegible]

世[illegible]

松[illegible]

参[illegible]内大臣の[illegible]

[illegible]達[illegible]

[illegible]

前[illegible]内大臣[illegible]

[illegible]

内

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]内大臣[illegible]

[illegible]

秋[illegible]

[illegible]

[illegible]

内大臣の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

参[illegible]

秋[illegible]

[illegible]

[illegible]

右 くしもわらひありそくわくしくのまち
みえてなかくうたかしてもれしめしける
立くらへしらなくさらにもうちしれて
よき詠なるへし
これやこの歌也
寛平のころかのうたあはせにまへしくをち
つらゆきのうたをもへたりとおもへるかなし
くちなつのきたはさきなるき定家の
り云
あらひそてのうかりけれはなく人と一しかね
みゆきのうへひとよはゝ
きつねてしはかせしいつかくしてありとも

業 みなのかはなへていつらなおもしろし
為明
むしろのかたはかりになしはなしもかく
いつてのうへいてはなとりなくさまして
伊しかたく
定家 ちかはしもしくしてゆくいへとこそあなた
くらへくさもやつなとこのさめく
てんつらゆき
いてんつらしかたちなみてくれて業平ことし
業 家隆の君の伊しつてくかくて
しすこと
今案 まことはやなりむりて六年のおと
つれもの

うつしおもしろかりけりおもしろく　蓋俗語にて
しきなるらかなし
下の詞りいとさうらうりいとをかしくのすら
こゝもとによりあはきよりくらはなまうりまゝあ
すへくかきいひ給はにほひ伊ことし
またやらへきなし
女郎の娘く歌しても誰ふくていたし
とはのかくいうそ
いとつりこそおもかりや
於　めくさのつにすとこのよのかれなかなかの
いとつりとをわかやあらむ
蓋云　女郎ト云ことをみなへしをも給ふ
いとつりとゆかしめし

あやしきしるしなれや何
六帖　あやしきやうにかへしれかしさらんかと家集
　　そこなるとかのきなかおもし
（そのこと）蓋説云　めやすさのあしきをかいへし
かきりもひくらのはなかくもさらにいそ遺へん思ふつる
蓋　河云　蓋何にしてもゐへ何よ
いまてくさ後のすゝのいとしく思ふの
もうかしこうい一へていつるも
門云（古今）かかしかる思ふかくしかしまつの
いしてあれもし言おもしひとのにかし
上素母とつの下今にいとくあひこらしの七字
かきに万葉の祕きとしうらしゆいひつく
われてさむし

万葉より云ゝ來の様によみきたり
然おほかたにつゝけ詞く作者は今の[illegible]論く
すへし
并上下ともの句ゝあらまし
ひくらしの
いつさえ　箋云　蜻蛉日記云るもの
さしくつるしいふへし云ゝ[illegible]
云すかこへけれとも
ゆるかつ作
かはのみ
箋云　みそし此の大河わたのつゝけるゝのゆきかけり

ちくはつきしひの中も
箋云　大河のつゝみ天川とちよくいふとあるの
きし又作の作も[illegible]ちりや　ならひく
万葉の作る又ある　かなへ　あめ　かいの
ひめとし　已上　箋
并　大川の[illegible]かひあくて
いつさかえ
いかわかの
こゝろしくら
ありしかり
箋　河云　天もりかりつ大葉の歌をも
しき作かはとろひく
箋　河云　とか　四中（作今）のへかしに作者の

神しうらしかりける　右衛門督の御むすめ
こまかし中宮のはゆるしなかりしかは
めてたくみかと多く
誠文のうへ中〳〵よしありておはしまして
中なりけるか給へるのしるしいま
ことありく

箋 千しや書の侍りし也　[illegible]
あやしこそありける[illegible]
箋河云 [illegible]をいふへしからのこなりけり [illegible]
もとはいとはかなき[illegible]かへる
めでたきやう 云
杉云 [illegible]しこの禊[illegible]
いまたまへはきりかうかりなり

箋 杉云 かやうて　河云 廁長女院かしく有く
こきゝのつもりなり　いま[illegible]も有く
右中将のつき
中納言兄
かしこまり　いつくしき女御の事也
中納言兄 ことにおはしますなる　かしく思て
さてのちにも　女御の御[illegible]
箋 杉云 言のこと　云々　女院の禊を
のかはりのかへしけむ　云々 箋 [illegible]
弘徽殿[illegible]しゆかしとのこりなくゆく
とのへまつて
まゐりて　箋 中納言兄にのみまつりて
みすのゆくしもしたゆくとも[illegible]

[illegible]

箋云 是より女御の君の御[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

細 [illegible]

[illegible]

箋云 [illegible]

[illegible] 之 箋ハ [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

細 [illegible] 中納言の君

[illegible]

箋云 中納言の君の御[illegible]

[illegible] 細一同云々

[illegible]

箋 [illegible] 此段

[illegible]

女御の出来の[illegible] 中納言[illegible]

[illegible] 箋 [illegible]

[illegible] 細同

（中納言）[illegible]

河 一向[illegible]

[illegible]

いやまのこと御申候
ぬやう御所ちやう之御たのみまいらせ候
てつき下きる御そへ候
箋申御頼よろしく候ゝ給候
論し出
手す之下筆し　百餘無數之候事候
一煙のうしおとすし　けふのもとをらいて
よしきら給へあり
書流猿河御　様律　ら　流水（等修）
以上義
よつこゝゆきたく
中納言見の事　まゐ女の人よろしく給
たまへく

あねさまへ　　　等女中の給
拙女中のら給へ　まいり女中のまゐらせ
しらひへまいらせてそてゑんする
このきうん人
もすしん人女中のゆうつくしうたよく
らんまし候　お内
とはかりてく　ら文ならく
ゆるらく　　等よ候へ
おしみつねんと
よめ見の御女とのふらまちゑく露ま中
さゆりく
あらみせつかゐ
かくかね杯とゆ御と帝のとなら

此草傍の書とまた給ふ紙ふよ給ひ申に
うちいらくも
年ふしきこりいましくのかけくえたりて
まいりし事にいてかの御殿御縁（御作）の御そ
篆書なるにきいてよしつる珍かなる文字
とうく御覧ず事あり給ふあとまりて
篆謎作名帳作にかけるさすら軍唐
しめく事よりなし
此外五十四帖のうち作者の自らを書識
文法文義一句もしるべからず事も有り
帳ある事しし
又おほかり世人作者世の人の持ちいて三具
然世人のかりきりしき長恨秋の長恨分（一差 異元）

灯りびしつきて給ひ給合の事すべし（今昔なし）
いしかきてきさとのつつ紙
篆何文窯（盗之）のことつくく今昔の事あるまし
いしかきてかりとも
篆之下品のうきとのくを共にこもおしし
ことりや意の事おほきよろしき
つりとしてものいはうかり
此粉白氏文集などは男女の抑く
古今いちやゆかしき紙のうら梅の花めとう
わかもつかれてことも
かや天外文字のかきのゆゑ
或面子（カホツキ）荏苒（ニアカニス）遊仙屈
わかいの人のかりしきことしくて事もなんし

抑 萬代比也
寛文廿封雨の比ゆかしきてかしこき御代
あまくの宮樹也
上の御つくりものしつるあるに天仏にはかりもなき
しこてさまかくへらむ人しこてるにはくに
ひとりこゝろにのみとゝめかくこゝろあらはしかへり見て
御名のみなからはぬ事ぞ 二年板也

国立公文書館
National Archives of Japan